

南方（フライリピン）

比島作戦従軍の思い出

戦車第二師団（撃兵団）

愛知県 藤田利雄

大正九（一九二〇）年一月十五日、私は兵庫県神戸市に生まれ、実家は上建業で大阪で育った。昭和十六（一九四一）年徴集兵で、中部第四十九部隊（留守隊）に昭和十六年五月召集、兵庫県青野が原において、戦車第六連隊で戦車教育、操縦手として一期の教育を受けた。私は自動車免許証を持っていたので操縦については自信があった。

戦車第六連隊が南方へ行くので、昭和十六年十月初

め留守部隊である我々も出動した。神戸から宇品、広東、黄埔に上陸し待機していたが、その時我々は何も判らず駐屯、民家に入り、戦車は空き地に置いてあった。

昭和十六年十二月八日、マレー半島、シンゴラに上陸したのだが、海が荒れ、戦車を船艇に乗せるのに苦労した。マレー軍の抵抗にあったが、出血はなく上陸出来た。戦車第一・第二・第四・第六・第七・第十四連隊であり、歩兵、工兵等も共に上陸したらしい。

私は連隊本部付副官車に乗った。連隊の編成は連隊長車、指揮班長車、副官車、通信車、連絡車が車隊本部の戦車であり、他にトラック、輸送車がある。各中隊は、中隊長車、三個小隊、連絡車であった。一個小隊は、戦車のみ三輛と小隊長車の四台。連隊は、四個

中隊、整備中隊で、戦車は改造前の九七式中戦車であり、砲の口径は五七ミリであった。

我が軍の中戦車の諸元は、重量一三・七トン、砲塔装甲は二五ミリ、砲の口径は五七ミリ、重機関銃二銃、口径七・六ミリ、馬力七〇馬力であった。

これに対し米軍戦車M3戦車（比島戦最期はM4）は、我が軍に比較にならぬ重戦車であった。M4の諸元は概ね次である。重量三三・七トン、砲口径六七ミリ、徹甲弾の貫徹能力一〇ミリ。M3は重量一二・七トン、砲三七ミリ、重機関銃二銃、口径七・六ミリ、装甲五一ミリ、毎時速度五七キロ。

大東亜戦争の時は日本は九五式軽戦車で対抗したという。九五式軽戦車の諸元は、重量六・五七トン、砲三七ミリ、重機関銃二、装甲一一ミリ、時速四〇キロ。

このように劣勢であったが、軍の外国情報は無かったであろうか。これでは対抗は出来ない。敵の弾丸は貫通すると高温が出て、煙粉で目をやられ、火傷もするので、搭乗者の戦力がなくなってしまう。一発敵

弾が当たれば日本の戦車は駄目になってしまう。

また、中戦車には、弾薬八〇発、銃弾三、五〇〇発のほかは予備として砲弾一〇〇発、銃弾四、〇〇〇発が積まれている。戦車の中は火薬でいっぱい、さながら火薬庫のようなものである。弾が当たると高熱を発生し、自爆してしまう。

私はマレー、満州、比島で山下閣下の隷下にいた。マレーの富部隊、満州第三七三部隊、比島では撃一二九四部隊である。山下大将は不運な將軍であると思っている。山下閣下は独逸語は出来たが、英語は不得手だったので、シンガポール陥落の時の「イエスカノール」、また顔もきつかったので英米に誤解されたのではないかと思う。部下には思いやりのある人であった。

昭和十七年二月十五日、シンガポール陥落、我々のマレー戦の終わりは昭和十七年二月であり、満州大連上陸は同年三月である。大連から公主嶺一勃利であり、そこには戦車第三旅団がいて、警備、演習と対ソ戦に備えていた。

昭和十七年の戦車連隊は次のごとくである。戦車第一・第三・第五・第六・第七・第九・第十・第十一・第十五・第十六であったと記憶している。

当時、ソ連の中戦車は七六ミリ砲で重量三七トンであったことを前に申したが、日ソ戦になれば歯は立たなかったと思う。戦車は実際は弱い武器で、制空権が無ければ勝てないし、戦車はその能力が違えば勝てないのである。これは、昭和十四年のノモンハン事件でも、また、昭和二十年のフィリピン戦でも実証され、我が戦車隊は大きな犠牲を払っていた。

満州から急遽対比戦における、我が隊の概況、私の思い出について申し述べる。

シンガポールを攻略し凱旋し、満州勃利に駐屯、対ソ戦に備えた戦車第二師団、戦車第三旅団（満州第二七三部隊）戦車第六連隊は、昭和十九年八月、師団動員にて勃利を出発しマニラ着上陸。

戦車第二師団（撃兵団）撃第一二〇九四部隊（戦車第六連隊）連隊本部副官車、戦車操縦士として、サンパウロ郊外で、ゲリラ部隊の抑圧のため駐留、ゲリラ

に再々夜襲攻撃を受けるが鎮圧する。後に命により転進。昭和十九年十二月マニラ着、市内警備。

昭和二十年一月、米軍上陸に備えマニラ出発、敵戦車はM4と考えられるので、前にも述べた如く、戦車と戦車の戦いは、個々の戦車の持つ性能により決まる。我が軍の戦車とM4では戦闘にならない。「いよいよ先陣訓（参考資料）の時が来た」と独り言を言う。敵の戦車に我が方の徹甲弾は通らないだろう。敵戦車のキャタピラ切断か、榴弾を使った方が良かったかも知れない。

昭和二十年三月、ムニオス郊外に入り、夜戦車壕を掘り、朝までに戦車を入れて、トーチカ陣地を完成。数日後、ロッキード（P38）ほか爆撃機約一〇機飛来し猛烈な爆撃を受けた。引き続いて砲撃、さらに続いて歩兵を伴う十数輛のM4戦車と砲戦を交えた。我が陣地損害は部隊長戦死、また、指揮班長車偵察に出発したが帰らず（車長は指揮班長高橋少佐が行方不明のために代理将校、その他トーチカ陣地が強靱な底力を発揮した。後任部隊長は部隊副官高橋少佐就任）。対

戦車戦として「M4に発見され、狙われたら、どうするか」という問題で、最終的には徹甲弾でなく榴弾射撃でM4戦車を盲目化することとなった。

二日後、M4数十輛が歩兵を随伴し、陣地四方を包囲、攻撃して来たとき、全戦車が陣地を出て交戦、榴弾射撃により、側面や軌道部を狙う機会を得て、敵に損害を与えることができた。

私の操縦する副官車は、走行中、操縦席の窓より機関砲弾が飛び込み、砲手に命中戦死、車内高温となり、煙粉により全員一時盲目化され、さらには火傷を負う。後、盲目運転前進中、また敵徹甲弾がキャタピラに被弾、切断する。ために戦車は停止、さらに第二弾は砲塔に命中するが、角度不良のため跳飛して事無きを得た（幸運にも命中した砲弾が焼夷徹甲弾でなかったため、鋼鉄を溶かす高熱により、戦車炎上を免れた）。

車長命令「部隊長車を除き、全員下車、操縦士は戦車に火を付け、爆破せよ」であった。燃料ポンプの配管を外し、軽油を底部弾庫の上に流し、大量の通信紙

に点火、それを油溜りに点火して下車、炎上を見届けるために、乗員と共に暫く戦車を見ていた。砲塔から赤い火明かりが見え、第一回目爆音を聞いて転進した。我々は、愛車というより最愛の最も重要な兵器を自分の手で爆破炎上させたのであるから涙が止まらなかった。そして、M4戦車は動く要塞、動く悪魔の使者のように感じた。

フィリピンでは、日本軍の戦車は米軍との戦車戦で全滅した。前に両軍の戦車の諸元を申したが、日本の軽戦車と米軍のM3中戦車、日本の中戦車も米軍のM4戦車だから勝負にならなかった。孫子の兵法ではないが、結果的には、我が部隊は全滅した。生きていたのは副官と私と機関銃の銃手（通信士）、車長（少尉）だけだった。

我々は血まみれだった。後ろの戦車の砲手がやられたのは判ったが、夜になってしまったので他の車は不明だった。「砲と弾をはずせ」との命令があったが、我々は運べなかった。その時から、私は血の臭いに敏感になり、血の臭いをかぐと興奮するようになった。

だから、その後には他の人が死んでも何ともなくなってしまう。

「敵を知らず己も知らない大本営や参謀本部の将校達は、大学で何を学んでいたのか、何を教えていたのか、汝の敵である米軍の強大な戦力を身をもって知ったのは、斃れて逝った多数の英霊なのだ」と怒っていた先輩の言葉通りであった。

私はマレーから継続して戦ったので、戦闘が怖いというより、死の恐怖により血の気が無くなり、体が震え、手足が痙攣し、気の弱い者は失神する者もいた。

いよいよ戦車を爆破し転進することになるが、私が戦車の操縦士として体験したことを申してみよう。戦車を操縦するのだが、戦闘中は一二センチ幅、二ミリの高さの僅かな窓というより厚いガラスを通して、しかも前方両側方しか見えない。車が震動するからほとんど前が見えない。瞬間しか見えない。この教育を内務班でするのは、二ミリ×一二センチの箱を眼に縛り付けて一日中いる。しかしそれは動かないので、その後、実際は上下、左右に動く訓練をする。普通の人は見え

ずとも訓練により見えるようになる。戦車はディーゼル故、音がひどく、車内が熱く、体臭が汗や尿の臭いに変わってくる。その中で戦闘だから感覚が鋭敏になり興奮してきて、敵との距離がはつきり見えるようになる。戦闘の場合には不思議な特性を発揮するらしい。従って操縦士は眼鏡をかけた人はとらず、視力は一・〇〜一・二はないと不採用であった。

話を元に戻す。戦車を破壊炎上させた我が戦車の将校一、下士官三、兵二の六人は、集結地に向け出発した。夜間移動で昼間は大きな木陰、または草むらで休養する。食糧は毎日水だけでの移動だが、全員元気で八日間の転進に団結してよく耐えたと思う。武器は車外員より得た手榴弾一発を自決用に携帯した。

八日間の転進後、地名は不明だが友軍に出会い、少量の食糧を分けてもらったが旨かった。人間の食物とはこんなに旨い物かと思つた。翌日、転進して来た戦友と再開し部隊の状況を聞くと、車輛は全滅、乗員も多数の戦死者が出たことを知らされた。集結点に到着し、部隊の生存者と合流し転進、各所で戦

闘隊形を整えながら、他隊の合流者を含め隊員が増加した。

昭和二十年二月、部隊はサラクサク峠に到着し、防衛陣地の構築に着手、「この峠を死守せよ」の命令が下った。峠の下には米軍が続々と集結している。到着以来四カ月、数度の大規模な爆撃と、日米一触即発の毎日が続いた。

山中陣地の将兵は食糧不足と水不足、加えて湿気にも悩まされて体力、気力が共に削減する。さらに、蚤、ヒル、頑固な疥癬で憔悴する者が続出した。このため気の弱い者なら発狂しそうな状態である。私も志願し、数度出撃したが、任務は敵の幕舎及び倉庫の破壊、爆破、並びに食糧の確保であった。

昭和二十年六月になり、米軍はバレット峠を陥落し移動が始まる。サラクサク峠前面の米軍はほとんど姿を消した。バレット峠を死守玉碎した鉄兵団(第十師団)及び、その他の部隊の英霊に対し、鎮魂をお祈りした。その時、軍より「サラクサク峠死守」の命令が解除され、部隊は転進を開始した。

七月、サリナスの山中に集結、戦車隊は歩兵として、伏兵的遊撃に出ることになる。若干の小銃と機関銃、爆薬でM4戦車隊に決死の弱点攻撃をかける。M4戦車と歩兵に損害を与え、M4戦車一輛擱座、一両を炎上させることが出来た。

私はこの戦場で大腿部に貫通銃創を受ける。時間が経過すると共に、大腿部に錐を打ち込まれたように右脚が動かなくなったので、いよいよ自決の時かと思っただが、報告のため山上より頭から滑りながら降りて、部隊本部に報告し、後に軍医から手当てを受けることが出来た。

本隊と別行動で、先行転進命令を受ける。行き先は、桜町(キアンガン)で途中誘導者が出るから、その指示により行動せよ、というものである。同行者左脚負傷者一人で、二人三脚で出発、地凶も食糧も無く、戦況も距離も判らずいよいよ死の行軍である。

本隊を出発して三キロ程進むと兵站の倉庫があり、残留兵より米を靴下に各人一袋宛で受け取る。量に制限は無いのだが、歩行困難な我々には、これ以上持て

なかった。その後一キロ程行き、敵の迫撃砲の洗礼を受ける。同行者が被弾で倒れる。重傷であるので手当の方法は止血以外になく、三角巾で止血をしたが一時間後死亡。小指を何とか切り取り、遺体を簡単に埋めた。

敵が接近しているように思われるので足を引きずりながら杖を頼って急ぎその場を離れた。行動開始の時から、痛みと共にだんだん脚の動きが不自由になる。毎日の食物確保するために芋畑を探す。幸いに山中にはまだ芋畑があり、芋は無いが葉と茎がある。だが傾斜面が多いので私には採取出来ない。しかし、何とか少量確保して飢えを凌いだ。行動を開始し一週間で脚が動かなくなってしまうと、ますます飢えて体力が衰えているのが解る。いよいよ自決の覚悟をしようと思った。その時、途中で出会った女性の言葉を思い出した「兵隊さんは限界まで待たず力を抜いて、諦めが早く粘りが無い」と話していたのを思い出した。

私は頑張る気になる。まず脚が動ける状態にすることを考える。銃瘡の入口と出口を錆びたナイフで切開

したが、痛くて飛び上がるほどだったが、内部の膿を搾り出した。傷口に古い包帯片を挿入し肉盛りを防いだので、動きが大分楽になった。脚の中の膿で動き辛いのがわかった。

私は同行者の激励も無く、飢餓地獄と戦い、戦傷というハンディと戦いながら、最後まで生き抜くことを心に誓ったのである。以後一カ月、毎日起きると手榴弾を握り締めてから脚の膿を搾る、物凄く痛むが、これに約一時間半。食糧の確保と食事に約三時間、誘導標識に従って日暮れまで、本隊に迫り着くための移動、時には誘導の士官が、わざわざ持参の食料を与えてくれることもある。本隊で毎日休まず確実に移動している戦車兵のことが噂になり、申し送りで大切な食料を援助してくれたことを後で知った。有り難く頭が下がる思いだった。

八月、キアンガンに近い山中の本隊に無事到着、部隊長より慰労の言葉を頂き、報われた気持ちがあった。痩せ衰え、片脚負傷、軽いマラリアでも敵の姿を見ては、覚悟も決まる。恐怖心は無い。時々前の山の頂上

に自動車が見れるようになる。いよいよ砲撃も近い、毎日山を見る。

昭和二十年九月二十日、敗戦を知らされる。来るべき時が来た。今までの戦闘で、よく生きて来られたと思う。数日後、武装解除で山を下りることを知らされる。いよいよ下山武装解除され、收容所に入る。私はトレーラーの使役に出たが、米軍の治療で傷は治った。

十一月三日、マニラ港から駆逐艦に乗り、鹿児島に上陸、召集解除、復員となった。

〔参考資料〕

戦陣訓抄

「恥を知る者は強し。常に郷党家門の面目を思ひ、愈々奮励して其の期待に答ふべし。

生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」

【解説】

藤田利雄氏の体験、戦車第二師団の苦戦にあるごとく、比島の犠牲は軍民合わせて五一万八〇〇〇人に達した。

昭和二十年一月九日、ルソン島攻撃のアメリカ軍は、リングエン湾に上陸を開始した。上陸したアメリカ軍は、有力な部隊をマニラに向けて南下させ、マニラ市では日米両軍の激しい攻防戦の後、日本のマニラ防衛軍は全滅してしまった。

一方、逐次ルソン島中部山岳地帯に後退した第十四方面軍主力は、アメリカ軍主力の空陸からの攻撃により、多数の人員を失い、加えて、食糧は枯渇し補給は無く、栄養失調症、マラリア、赤痢等の伝染病のため多くの犠牲者を出した。

このため在留邦人等の子女を含め、軍民の戦没者は前記のごとく五一万八〇〇〇人の多くに達し、先の大戦中最大の犠牲を出していた。特にルソン島では追いつめられた民間人は実に悲惨であったという。